

## ② 実用新案公報 (Y 2) 昭 57-29359

⑤ Int.Cl.<sup>9</sup>

識別記号

庁内整理番号

② 公告 昭和 57 年 (1982) 6 月 26 日

H 05 K 13/00

6555-5 F

(全 2 頁)

1

2

## ⑤ 調整器具

② 実 願 昭 52-135206

② 出 願 昭 52(1977)10 月 11 日

⑤ 公 開 昭 54-62049

④ 昭 54(1979)5 月 1 日

⑦ 考 案 者 島 村 涉

川越市大字上戸 187-7

⑦ 出 願 人 島 村 涉

川越市大字上戸 187-7

⑦ 代 理 人 弁 理 士 島 宣 之

## ⑥ 実用新案登録請求の範囲

(1) 基台の裏面に固定した支持部材に、1 対の傘歯車を備え、一方の駆動歯車の軸端に調整つまみを取付け、さらに他方の従動歯車の軸には、その軸に対して弾力的に上下動し、かつその軸と一体回転する円筒をかん合するとともに、その円筒の上端開口内には、バリコン等の回転軸に一致する稜部を形成し、この円筒の開口が基台にセットした配線基板上に設けたバリコン等の回転軸と対向する関係にした調整器具。

(2) 前記円筒上端に、アダプタをかん着して前記稜部を形成するとともに、このアダプタと駆動歯車の前記軸端との間にスプリングを介在させる一方、円筒の側面に軸方向の長孔を形成し、この長孔にピンを挿入して、円筒を軸に対して弾力的に上下動自在で、しかも軸と一体回転する関係にした前記請求の範囲第(1)項記載の調整器具。

## 考案の詳細な説明

この考案は、ラジオ等の配線基板における回路の検査や調整を行う際に使用するバリコン等の調整器具に関する。

上記のように検査や調整を行う場合には、当該基板を、接点ピンを多数設けた基台上に乗せて行うが、この際バリコン等の回転軸は、上記基台の裏面に突出するようになっている。

そこで従来は、基台の裏面に指を突込んで、その基台の裏面に突出する上記回転軸を回すようにしていた。

しかしこの従来のやり方では、当該回転軸を正確かつ迅速に回転することが困難であるばかりか、指を狭い個所に突込むので、他の電気部品に触れたりして感電する危険もあつた。

この考案は、きわめて簡単に、しかも安全に調整をなしうるようにした調整器の提供を目的とするものである。

以下にはこれを図示の実施例について説明する。

脚台 1 上に設置した基台 2 には、多数の接点ピン 3 を弾力的に突出させているもので、この接点ピン 3 に配線基板 4 の裏面を圧接させ、接点ピン 3 に接続された測定器等を配線基板 4 上の回路に接続する関係にしている。

上記配線基板 4 上には、種々の部品を介して電気回路が形成されるが、第 1 図においてはバリコン 5 のみを示している。このバリコン 5 はその回転軸 6 を、配線基板 4 の下方に突出させているもので、その下端には、稜線を形成するとともに、その下端を前記基台 2 に形成の孔 7 に臨ませている。

基台 2 の裏面には、支持部材 8 を垂下させているが、この支持部材は、直角に接合した垂下片 9 と水平片 10 とからなっている。

上記垂下片 9 には駆動傘歯車 11 の軸 12 を回転自在に支持させているが、この軸 12 の外端は、脚台 1 の外方に突出させ、その突出端につまみ 13 を取付けている。

なお図中符号 14 は、軸 12 を支持するための他の支持部材である。

前記水平片 10 には、従動歯車 15 の軸 16 を回転自在に支持させているもので、つまみ 13 を回すことによつて、軸 16 が回転する関係にしている。

上記軸 16 の上側部には、円筒 17 を摺動自在に

3.

かん合しているが、この円筒 17 の側面に、軸線に平行した長孔 18 を形成し、この長孔 18 を介してピン 19 を軸 16 に植設している。したがって、円筒 17 は長孔 18 の範囲内で上下動しうるとともに、軸 16 と一体回転する関係にある。

上記円筒 17 の上端開口部には、アダプタ 20 をかん着し、第 2 図に示すように、開口部内側に稜部 21 を形成している。この稜部 21 は、バリコン 5 の前記回転軸 6 の稜線と一致する関係にしているもので、回転軸 6 の稜線と一致する関係が維持されれば、アダプタ 20 の形状は不問である。

上記アダプタ 20 と前記軸 16 間には、スプリング 22 を介在させているもので、したがって円筒 17 は通常その長孔 18 下端をピン 19 に接触させる伸切り状態に維持されるものである。

しかして配線基板 4 を基台 2 に乗載すると、円筒 17 とバリコン 5 の回転軸 6 とが対向し、両者の稜線が一致すれば、それらはかん合する。

稜線が一致しない場合には、円筒 17 がスプリング 22 に抗して下降するが、つまみ 13 を少し回転させれば、稜線が一致したところで、両者はかん合することになる。

なお、円筒 17 の上端を、第 2 図に示すように、皿状に座ぐっているのは、回転軸 6 が円筒 17 内にス

4

ムーズに入るようにするためである。

上記のように回転軸 6 と円筒 17 とがかん合した後は、つまみ 13 を回せば、バリコン 5 を自由に調整しえ、従来のように、基台の裏面に指を突込んだりする必要が全くない。

以上の説明から明らかなように、請求の範囲第 (1) 項記載の調整器具によれば、バリコン等の回転軸を調整回転させるので、基台の裏面に指を突込んだりする必要が全くなく、それだけ簡単かつ正確に、しかも安全に操作しうるものである。

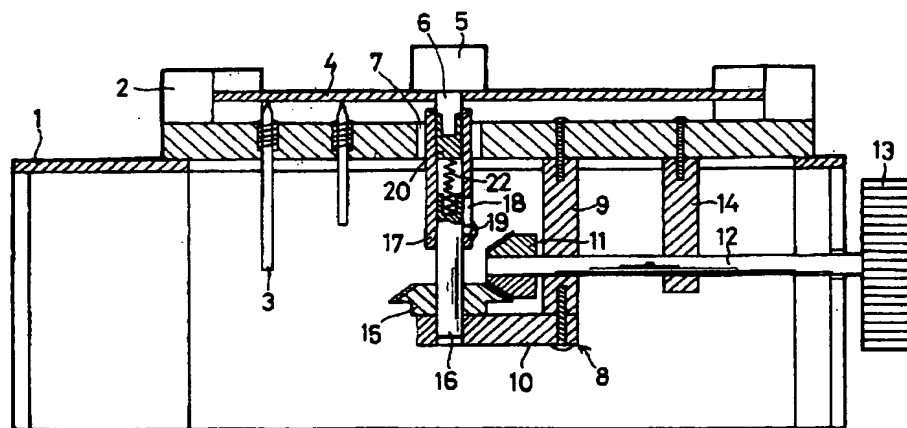
請求の範囲第 (2) 項記載の調整器具によれば、構造がきわめて簡単で安価に製造でき、しかも上記 (1) 項記載の調整器具と同一の効果を達成しうるものである。

#### 15 図面の簡単な説明

図面はこの考案の 1 実施例を示すもので、第 1 図は断面図、第 2 図は円筒上端の開口部の拡大斜視図である。

2……基台、4……配線基板、5……バリコン、6……回転軸、8……支持部材、11……駆動傘歯車、12……軸、15……従動傘歯車、16……軸、17……円筒、18……長孔、19……ピン、20……アダプタ、21……稜部、22……スプリング。

第 1 図



第 2 図

